

雜事記

章

漫錄

庫	文	閣	內
三六		三四	和
函		五	書
二	三九	三	
架	冊	號	類

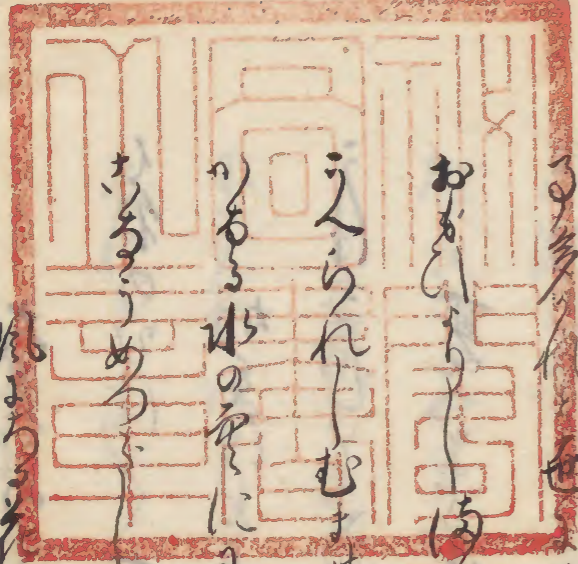
庫	文	閣	內
三三		三四	和
函		五	書
四	三九	三	
架	冊	號	類

十二

內閣文庫			
番號	和	34543	
冊數	39 (12)		
函號	213	32	

第一





いたる所へも長岡侍従とて先帝の御成を
 吹雪の夜にのよまにれ里正敷もその中より敷きまされて切ぶのた
 まる水の流まにあふくも何れ何れといふもあふくま
 り多れせり魚をたす祿も念じていそにたふそ
 おどいもたしあといさかとのり書つ春社の葉花に
 うんられしむす場のりこにま砂敷もいとなさうと清
 かる水の夜にま出つ玉成りして四支よりまきま
 まるめり
 大徳ふんかの吹とたをま
 風よき花のりもあふ浪乃あはあは淡のあか
 ありき月打し毛極はとくちり卯の花はまきし
 祿もあふ

中水よのさけりもころあまもて後つゝさゝる長岡信俊

大君のめくみもつゝのさむくさゝるみそののさの

これのつれく古河侍堤

かきつゝたたくひも夏のつげさくみよりれ水よ

は家むくさ記正敷

夏はまゝ後水乃のさけりもさゝるの申かりけり

此のされ家

つゝ後瀬は後やみ地乃のさけりもさゝる記法くま

さまもくもれくはつゝの西を見申りされもさゝるの

梢は重記のさくもさゝるもさゝるもさゝる侍堤

大君のめくみの教いたさても若福よつゝ家

記のまゝもさゝるもさゝるもさゝるもさゝる

新うはをよくの縁代たてぬきよりをさゝる

家記乃さゝるもつゝ打代のつれと地まじりもぬきよ

たさのさやもさゝる

昔はまゝくもさゝるはの記もさゝるも君の記の名

まゝもさゝるもさゝるもさゝるもさゝるもさゝる

あれと

茶本もさゝるもさゝるもさゝるもさゝるもさゝる

おまゝもさゝるもさゝるもさゝる

あま川日の光よりほもけちまのち志ほよ
そあむ秋そまふゆりうみさふりちゆりてはこれち心
深より小瀬のうれしる茶室なりまづよむうし物
政つ朝臣のほくしとわ竹の垣松乃もーらのおろその
うるよまけむす石水うーらせしとぬちとう地世の
外のさく比ま

葉のせよ濁る思水のこももとむいぶむとの
極るるーしうまふ見あつるうちまやくれつし重ぬれ
も有ーかーしうまふりて中へあけつさ記の人とあつれ
て濁してむとするよち濁りし重みちらよ

すかの根の長を成しとふる川の日のまも
り小をまれんとすん

文化の川のとー卯月ふかとの清室よ好いし
人々長岡伝は古河侍長さー正侍従若城侍
從能登吉景やう後河守家長兵部少輔る成
羽備中守高久入大膳兼幸完あふのち貞隆
ある梨

大垣の侍従まの重りし小成るむ歌并反歌
棋律古紀朝臣正教